

# 弱視者の情報活用環境について

～当事者の Web 利用からの考察～

三宅 洋信<sup>†</sup>

<sup>†</sup>「見やすさ」とデザインを考える会

E-mail: <sup>†</sup>ZXE01722@nifty.com

## 1. ここでの弱視者の範囲

弱視者における Web 利用と情報活用を考えると、その状況や課題は一概ではなく、弱視者のための教育や訓練を受けてきたかどうかに関係している。ここでは、一定の教育や訓練を受けた弱視者の状況や課題についての報告とし、高齢化に伴う病気による弱視者と区別することとする。

弱視者には、まぶしさを苦手とする人、ある程度以上の明るさを必要とする人など障害の状況によって「見やすさ」の基準が異なるため、操作する場所の明るさ、光の向きなどが、情報を入手しようとして行う、画面を見てボタンを押すといった視覚的操作の効率に、一般の人以上に影響しやすい。そのため、情報提供を行うためのユーザ・インタフェースの仕様については、ヒアリングにより「見やすい」「見えにくい」の理由の追求が重要になってくる。

## 2. Web アクセス方法と情報活用の現状

弱視者の Web 利用環境は、その障害の程度に応じて、画面解像度やデザインなどの設定変更による対応、画面拡大ソフトの利用、画面読み上げソフトの利用などがある。Web は、製造メーカーや運営団体によって操作環境が異なる専用端末と比較すると、自分の使い慣れた環境を利用できることが、アクセスの可能性と利用時の安心感につながっている。そして、Web の利用によって、情報検索の効率が格段と向上した。とくに、外出に備えた地図情報や時刻表などの情報を事前に入手し、自分の好みの状態で準備できることで時間を有効に利用できる。また、インターネットによる予約・物品購入、銀行取引も、他人に援助を依頼することなく実現できれば非常に便利である。

しかし、Web を利用したサービスの中には、画面表示や必要な操作について、ユーザ個々の利用環境では利用しにくい場合も多数発生している。最近では、Web 画面を拡大するツールを Web に組み込んでいるサイトが公共団体や福祉関連企業で増えてきている。現段階では、よりいろいろなサービスを利用可能とするという観点から、画面表示を固定しないなどの配慮によって、それぞれのユーザ端末の設定内容が有効なサービスを増やしていく必要がある。

## 3. Web デザインの重要性

弱視者にとって Web デザインと「利用しやすさ」は密接に関係している。ちょっとした配慮で、弱視者の「見やすさ」、「利用しやすさ」は向上する。これは、Web に限ったことではなく、各種のユーザ・インタフェースとデザインの関係に応用できる。文字と背景、装飾関係でのコントラストの確保、レイアウトの簡略化、シンボルマークの理解が可能かなどが重要な配慮項目としてあげられる。また、操作を必要とするときには、選択（クリック）する場所を明確にすることやキーボードだけでも操作できることが必要である。

## 4. インタフェースの弱視者対応と高齢者対応

弱視者への対応は、高齢者対応の内容と重複することが多い。今後、さまざまな機能の追加やサービスの利用が期待できるケータイ（電話）を例にとると、画面・ボタン表示が大きい点や操作の簡略化、マニュアルでの文字の大きさやレイアウトは、弱視者にも有効である。しかし、黑白反転の機能や光の強さ、好むフォント、用紙の色、必ずしも「見やすい」条件が整った環境だけで利用するわけではないことを考慮して、操作感やボタンを押した感触については、必ずしも高齢者ニーズと一致するものではなく、弱視者への調査が必要になる事項である。製品化の観点からは、本体の形や色、着信音などデザインや仕様の好みに関しても、「見やすさ」とは直接関係ないが、性別や年齢による異なった好みに応じて選択できると便利である。

## 5. 当事者の役割

障害者専用機器は高額であり、利用者本人の経済的負担が大きい。ユニバーサルデザインを目指して設計された機器や商品の普及は、経済的負担が軽減され、周囲の人のサポートを受けられやすいというメリットがある。また、端末の設定や開発から、一般と同じ情報源にアクセスしたり、同じサービスの利用が可能になれば、活動の可能性が広がるはずである。

これらを具現化するためには、当事者の立場から、自分の見えにくさを客観的に、しかもどのような条件下で見づらいか説明し、どうしたら見えやすくなるか、具体案を示すことが重要となってきている。